

---

# 愛を。君を。

雨音未波

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛を。君を。

### 【Nコード】

N4643C

### 【作者名】

雨音未波

### 【あらすじ】

男子校に転校する事になった女の子の物語です。ハチャメチャな話で、かつこ良い男の子達が沢山出てきますので。よろしくお願いします。

## プロローグ（前書き）

これからのお話に多少エロが入るかもしれませんが。そんなにひどくないですが、ご了承ください。そしてどうか感想くれると有難いです！！

## プロローグ

あなたは  
…

切ない…切ない恋を…

した事がありますか？

幸せを……見つけてください  
…。

…

「はい？」

「だからね、転校するのよ」

……え …… ちょっと待って、転校って… はっ？

「ごめんな由有<sup>ユウ</sup>、俺達仕事で海外行く事になってさ、悪いが転校してくれ！」

「ちよっ… 意味分かんないし！ならあたしも海外行く！」

「それは駄目だ」

「あなたには日本に居て欲しいのよ、あっち行くといつ帰れるか分からないから。仕事で行くし… 寂しいかもしれないけどごめんね」

お母さんはあたしの頬に手を当て、優しく撫でた。

お父さんもあたしの頭に手を乗せて撫でてくれる。

そんな事言われても…両親が海外行つて、あたしは転校！？ありえないしっ！！

すっごい嫌なんですけど！！

「学校にはもう手続きしたから。その理事長が俺の親友でさ、由有の事話したらすぐオーケーしてくれて」

「それって…まさか昂<sup>たか</sup>さん？」

「そうだ。良くしてもらうんだぞ？」

「…ねえ…その学校つてさ…まさか……」

「ああ、男子校だ」

「無理でえええすっ！！！！！」

男子校に転校つて！！

何考えてんの！？娘を男子校に放り込むな！！

「何で男子校に転校しないといけないの！？おかしいでしょー！！」

「仕方ないだろ、だって昴が…」

親の癖にもじもじすんなっ!!

ちよつとどうしよう!!マジで!!男子校に転校はやばすぎでしょ!!あたし女なのにつ!!!!

「心配しないで由有、男子校でも昴さんが居るんですもの。何かあったらすぐに昴さんに言うのよ」

「お母さんまで…あたし嫌だよ男子校に転校なんて…、やってけないよ…」

「大丈夫。あなたならやれるわ。あつ、ちなみに男装して行くのよ」

はああああ!!!!??

男装するの!!!!??マジですか?

「大丈夫。あなたなら男装似合うから」

いやいやいや。

嬉しくないから。

「明日学校まで送ってあげるわね。楽しんで学校生活送りなさい。手紙も書くから」

うう…どうしよう。

あたし男子校に転校しちゃうんだ。しかも男装して…。嫌だよう…。

「あっちなみにその学校には寮があるから、明日から寮生活よ」

はっ…寮…？寮……。

危なすぎでしょおおおお！！！！！！

ちょっとちょっと…あたしこれからどうなの？



【1】王子様登場

あたし…上原由有は現在、男子校の校門の前に立って居ます。

名は聖洸輝学園。  
ひじりつぎ

今日からあたしが通う高校……。

「はあ…憂鬱…男子校なんて…」

てか何気この学校豪華だね…。校門でかいし、めっちゃ高級そうなライオンの像がお待ちしてるよ？

昴さん凄すぎ…。

「…よし、行くか！」

意を決しあたしは中に足を踏み入れた。

「……すっごー…」

どっかの洋館ですか此所は…。いや、校舎だよね？

高級すぎる…。

あたしが見たのは、めちゃでかい校舎と、広い敷地。  
中庭だと思っけど、それは高原に思えてくるような広さ。

生い茂った草と木。何千本あるんだろう。

とにかく凄いの一言。

外でこれって…中はどうなってるんだろう。

石像たつくさんって感じ？電気は全てシャンデリアだったり…。

ほんと金持ちだねえ、昂さんは。

てかこの学校って、もしかして財閥関係の人とかが居たりするのかな。

金持ちが集まる所？

あたしめっちゃ一般市民ですけど…。いいの？

「さてと…まあ行くか」

迷わなきゃいいけど…。

…

「ええー…玄関は何処ですか？」

広すぎて玄関すら見つけれません。

あたしは今何処に立っているんでしょう。

「…迷った、完璧迷った。どうしよう…迷っちゃったよ!？」

誰かあああ!!

誰も居ないよおお!!

「どうしたら良いんだろう…これじゃあ昴さんト」行けない…」

無駄に広いんじゃないやボケえ!!

トントントン

後ろから肩を叩かれる音…。

「ん？……！！！」

心の中はまるで…奥様は見た！！って感じだった…。

「君、今日転校して来たって子？」

び…美形ー！！！！

何じゃこの人！！美形すぎる！！！！

同じ人間！！？

「あ…はい…」

「そっか、此所で何してんの？」

うおあつ！！美形スマイル！！美しい！！

「えええっと…理事長室に行きたいんですけど、広すぎて迷っちゃって…」

「じゃあ俺案内してあげるよ、ついて来て」

「えっ？ちよっ…」

案内！？してくれるの…？

何て優しい人なの！？

美形で優しいって今まで通ってた高校にはこんな人居なかったよ！？

素敵だなあ…。

「…ってちよっと待って！」

あたしはあの美形君に急いでついて行った。

## 【2】

あたしはとてもとても優しい美形に、理事長室まで案内してもらっていた。

中に入ると其処は……、  
言い表せないくらい豪華。

うん、何だこれ。

玄関でも圧倒されたけど、廊下がこれって。

ありえない。

慣れるまで時間かかりそうだなあ…。

「ねえ」

「はい!？」

びつくりした、突然話しかけてくるんだもん。

「名前何て言うの？」

「あつ上原由有です！」

「由有ね、呼び捨てしてもいい？」

「はい、いいですよ」

うわぁ…呼び捨てだって。こんな美形に呼び捨てで呼ばれるって、  
きっともう一生ないよね。  
大事にしよ。

「俺は神無郁<sup>かんないく</sup>、三年な」

「えっ！三年生だったの！？」

「ああ、よろしくな」

「はいっこちらこそよろしくお願いします！」

「んな緊張すんなよ、仲良くしような」

郁先輩の綺麗な手があたしの前に差し出される。

あたしはその手を握った。これからよろしくという意味を込めて強く。

「えっと…郁先輩、聞いていいですか？」

「郁って呼んでよ、先輩要らない」

「いえいえっ！！先輩なんで！呼び捨て出来ませんよ！郁先輩と呼びます」

「むう…不満…」

あつ膨れっ面だ。

先輩可愛い。

「先輩…その顔可愛いです」

「はっ？」



「その膨れっ面ですよ。男の人に言うのは失礼だと思うけど、可愛いですね先輩は」

「!」

可愛いよ、先輩。好人そうだし、仲良くなれて良かった！

「…へえ…」

「先輩？どうしました？」

「ん？別に何でもないよ。行こっか」

「あっはい！」

あたし達はまた歩き出した。

…

「この通路を真っ直ぐ行つて右に曲がると、すぐ其処に理事長の廊下があるから、その中の理事長室つてどこ入ればいいよ」

「理事長の…廊下…？」

あたし達は他愛もない話をしながら此所に来て、また一層郁先輩と仲良くなった気がした。

それは嬉しいんだけど…理事長の廊下って何？

「全部理事長の部屋って事」

「全部…」

全部！？ちよつとちよつと昂さん、あなた何ですか。自分専用の廊下があるんですか。  
凄すぎだよ…。

「それじゃあ、俺もう行くな」

「あっありがとうございました！助かりました！」

「うん」

「今度お礼させて下さい！」

せつかくこんな親切にしてくれたんだもん。  
お礼しないとだよねっ！

「お礼？……じゃあさ、ちょっと」

「えっ？」

何だろ…手招きしてる？

あたしはちょこちょこ先輩の前に移動した。

そしたら突然先輩が顔を近づけてきて…って…えっ？

…あたしと郁先輩の唇が重なった。

「…お礼はこれでいいよ、由有可愛すぎだからキスしちゃった。それじゃね」

先輩はあたしの頭に手を乗せてから、来た道に戻って行った。

あたしは未だ放心状態…。

……うん…先輩今何したの？  
えっと…えっと…え…。

……ええええええ！！！！？？

今っ…今！！

キ…キスされたあああ！！！！  
郁先輩とキスしたっ！！！！  
はっ！？意味分かんないし！何で！！？？

ちよつと待つてよっ！！！！

理解不能…先輩ってあたしの事男だと思ってるよね。なのに何でキスするの！？先輩もしかして……いや！！それは考えたくない！！  
でもでもーっ！！

てかあたしのファーストキス奪われた！！

ちよつとおおおお！！！！

「…先輩はあつち系なのか…ああ…嫌だ…結構信頼してたのに…あんな先輩嫌だよ…」

あたしはショックすぎて其処からずっと動けずにいた……。

【3】

…あれから、どれくらい時間が経っただろう。

あたしはそのまま放心状態になり、その場所に突っ立っていた。

さっきのがショックすぎて…もうどうしたらいいのか分からなくて…。

「はあ…」

ずっと此所に居ても仕方がない…理事長室に行こう…。

あたしは重い足取りのまま理事長室へ向かった。

…

コンコンッ

乾いた音が響き、その後すぐに扉を開いた。

「失礼します」

扉を開け終えたら、突然体を抱き締められる感覚…。

「遅い由有！！待ってたんだぞ！？何してたんだよー！！」

「ああ…ごめんなさい昴さん、ちよつと色々あつて…」

「色々？てか顔色悪いぞ？大丈夫か？」

「うん…」

あたしに抱きついてきたのは、昴さん。

この学校の理事長、兼あたしのお父さんの親友。

いつもこうやってあたしに抱きついてくるから、結構うざかったりする。

「そうか、良かった。どうだ？この学校は、気に入ったか？」

「でかすぎ広すぎ金使いすぎ。てゆーか理事長の廊下って何よ。しかもこんな豪華な学校にしちゃってさ…」

「まああれだ！俺の趣味だな！」

「変なの…」

あたしは一気に冷めた。

これからこの学校でやっていけるか正直不安だ。

郁先輩も…何であんな事？信じられない…。

かつこ良いのに…美形なのにあれは無いでしょ。

男にキスって。

おかしい。

「由有…？どうした？」

「あつ何でもない」

「ならいいけど…この学校の説明するな」



「うん…」

それからあたしはこの学校の事について色々聞いた。

ほんとこの学校は凄いね。うん。

何か六階の校舎が3つもあって、生徒と教師、理事長の校舎が揃ってらしい。

広い中庭も設備されてて、しかもふつーにお店が置いてあるんだって！！服の！！

どんだけ！？

さすが昂さん。さすがお金持ち学校。

財閥の人とかが沢山居て、全員お坊っちゃまなんだって。

てか一言で言うと、文句無しの学校だね。

そんな中であたしみたいな一般人が生活なんて大丈夫なんだろうか。

不安だよ…。

先輩の事もあるしさ。

郁先輩…どうしてあんな事したんだろう…。

変人なのかな？

「説明はここまでだな。他に聞きたい事とかはあるか？」

「うっん、別に…あ、寮は？」

「心配するな、部屋は一人部屋にしておいたぞ」

「ほんと！？やった！！」

良かったああ…一番心配してたんだよね、寮が。

女の子だし？二人部屋はまずいじゃん、色々と。

ほんと良かったよ…。

「これから校舎を案内してあげたいんだが…俺忙しくてなあ…どうすっかな」

「別にいいよ？案内くらい」

「迷うだろ？」

「うつ…」

確かに迷う。現に迷ったしね、最初。

「…まあ今は職員室に行けばいいからー、電話で誰か呼ぶか」

「えっ？ちよつと…」

言うが早いが昴さんはポケットから携帯電話を取りだし、どこかにかけ始めた。

「ああ俺だ。転入生の案内役を誰かに頼みたいんだが…、…そうか、分かった。じゃあよろしく頼む」

電話をし終えて、携帯をポケットに入れる。

一体誰に電話したの？

「今から寮長来るから、そいつに案内してもらえな」

「寮長？そつか…」

コンコンッ

「来たな」

えっ！？早っ！！

「入れ」

昴さんの声を合図に、扉が開いた。

入って来たのは…。

「失礼します」

「…！！」

うわぁ…！！これまた美少年だね！！

可愛い系？

「理事長、案内役なら前から言っというて下さい」

「悪かったよ、雅希<sup>まさき</sup>。でも早かったな」

「近くに居たから。あ、その子が例の転入生？」

「ああ、仲良くしてやってな」

雅希と呼ばれた人は、あたしに視線を移した。

ひえっ目が合ったっ。

…綺麗な子だなー…。

「芹沢雅希です。寮長やってるんで、今日からよろしくな」

「あつ上原由有です！こちらこそよろしくお願いします！」

「うん」

うわっほんとに可愛い！

天使の微笑みやね…。

癒される…。

「校舎案内してあげる、行こう」

「は、はいっ」

「あー雅希、職員室に連れて行ってもらえるか？」

「はい、分かってますよ」

そしてあたし達は理事長室から出ていった…。

…

「この学校見てどう思った？」

「えっ…えっと…広いなあって思いました」

「そっだよな、びっくりしたでしょ」

「はい…あ、あの雅希…先輩？」

「あ、うん。三年だよ」

「じゃあ雅希先輩ですね、あたっ…俺の事は由有でいいです！」

「じゃあ由有？」

「はいっ！」

「何か困った事とかがあったら俺に相談してね、力になるから」

「はいっ…！ありがとうございます…！」

「うわぁ…！何ていい人なんだろう…！」

「頼もしいな…」。

「あっそれで寮についての説明何だけど」

「はい」

寮かー…不安だけどドキドキして、雅希先輩みたいな人が寮長なら楽しいかなって思ってるんだよね。  
実は。

「寮はあれだよ。見える？彼処に建ってる…」

ん？えっと…あのゴージャスな洋館みたいなやつですか？

あれが寮なの！？

ほんとただけ！！??

「彼処に住むんですか！？」

「うん、不満？」

「不満だなんてとてもとても！！むしろ大満足ですっ！！」



「良かった。で、寮は彼処でね、一階がみんなの憩いの場って感じで、遊ぶのとか沢山あって有意義な時間が過ごせるよ」

「へえー…」

「二階は一年の階で、三階は二年、四階は三年になってる」

「成る程…」

「由有は一人部屋なんだよね？」

「はいっ」

「後で部屋案内するから。それと食堂なんだけど」

「食堂！！」

「そっだよな。食堂普通あるよね。」

「また超豪華なんじゃないの？」

「食堂はあれね」

【4】

そう言っ指差した先にあつたのは…。

寮ぐらいの大きさがあり、これまた超豪華な屋敷と言われてもおかしくない程の建物が建っていた…。

「……………」

あ…あれが…食堂…？

あんなのが食堂なの？  
あれが？

ちよつと…あんなでかくていいの？だってご飯食べるだけでしょ？  
無駄にでかいって。

「由有？どうした？」

「あついえ！！てか…あれが食堂って凄くないですか？」

「そう？まあ少し大きいよね」

あー…そうか。要は感覚の問題なのね。あたしは一般人なんで…、成る程…。

「次に職員室案内してあげるね」

「はいっ」

はあー…緊張する。

昨日の夜挨拶考えたけど…ちゃんと言えるかな。

新しいクラスか…。

頑張ろ！！

雅希先輩に連れられ、あたしは職員室へ向かった。

…

「此所が職員室だよ」

雅希先輩に案内されて、結構距離があつたらしく時間がかかってしまった。

「先輩案内ありがとうございました!!」

「ううん、それじゃあまたね」

「はい!!」

先輩は来た道に戻って行った。

あたしはそれを見送ってから、扉の方に振り向いて一つ深呼吸をした。

「…よし、行くか!!」

ノックをして、あたしは静かに扉を開けた。

「失礼します」

入ると先生達が一斉にあたしを見てきた。

ちよつときよどつちやった。

「うえ…えつと…転入してきた上原由有ですっ担任の先生は…」

「ああ俺だ」

出てきたのは…めえつちゃ若いまたまた美形の男の人…！

えっ…！こんな若い人が先生やってんの…！？  
もっとオヤジっぽい人が先生だと思ってた…！

「上原な？俺は1-Aの担任の河口だ。よろしくな」

「は、はい！よろしくお願いします…！」

「おおっんじゃあ教室行くか！」

「あ、はい」

あたし達は1 - Aの教室に向かった。

【5】

「そついやぁあんた、結構可愛い顔してんのな」

「うええ!？」

教室に向かつてる途中、河口先生がいきなり変な事聞いてきた。

な、何言い出すんだこの人!!!

可愛いって!!はぁ!!?!

おかしい…。

「そついう奴は…危ないぞ?」

「危ないって何が…」

「気を付けろよ、襲われないように、あいつら容赦ねえから」

「はぁ…」



「……（ほんとに分かってんのか？）」

「……………」

どういう事？襲われないようにって…何が？

てゆうか…可愛いっておかしくない？あたし男ですけど。ほんと  
女だけど！

先生が生徒に、しかも男に可愛いって言うか？

郁先輩もだし…この学校は変人が多いのか…。

「着いたぞ」

「えっ！」

着いた…。…ここが…1-A…。

やばい…緊張するっ！！

ひえええ！！心臓バクバク！！

「俺が先に入るから、合図したら入って来い」

「あ…はい」

てか…教室の中すっごい煩いんですけど。

男子の会話が聞こえる…。

もつと静かに出来ないの？

そんな事を考えていると、先生が扉を開けた。

「おらお前等静かにしろ！！ホームルーム始めっぞ！！」

うわぁ…静かになった。

先生恐るべし。

「今日は転入生が来るから！ほら入って…」

「……いよっしゃあああああああつ……！！……」

えっ！！？？ええ！！！！？？？

何この盛り上がり様は！！

入りづらいんですけど……！！

「静かにしろっ……！！ガキじゃねんだから……！！」

しーん……。

はえ……！！やっぱり先生凄いわ……！！  
敵にしたくない……。

つまり目つけられたくない。うん、先生最高。

「入って来い」

はっ……合図だ……よしっ……！！

あたしは意を決して中へと足を踏み入れた。

「……えっと、上原由有です。よろしくお願いします」

悩みに悩んだ結果、挨拶はこんな簡単になった。

だって普通が良いよねやっぱ。

…てかね、みんながあたしを見て固まってるのよ。  
何故に？

「「「うおおおおお！…！」「」「」

うわあああ！！！！  
びっくりしたっ！！

いきなり大声出さないで！！

「可愛いー！！！！」

「俺達ツイてんな！！！！」

「神様ありがとうっ…！！！！」

…はい？ええと…何か可愛いとか聞こえるんですけど…空耳？

泣いてる人いるし！！

ありえない！！

「上原は親の都合でこの学校に来たんだ。みんな仲良くしてやって  
な」

「「「はあい…！！」「」「」

うつ!!あたしが微妙かも!!  
仲良く出来ないかもしれない!!

「んじゃ上原、席は窓側の一番後ろの彼処な」

おお!!窓側で一番後ろって嬉しくない!?

ラッキー!!!

あたしは軽やかなステップで席へと向かった。

向かう途中、沢山視線を感じて何か嫌だった。

絶対全員見てるよね!!??

何だよ!!!

あたしは視線を気にしながらも、何とか席に到着。

座ってもまだ視線を感じる...

何さ!!見ないで!!

「…ん？」

前の席から視線を感じる…。ジーンと見られてる気がする。

「…あの…」

あたしは前の席の人に話しかけた。

「ん？あつごめんなつ見てて！」

「いや…いいけど…」

またこの人もイケメンだな…かつこ良い…。

赤い髪が似合ってて、耳には沢山ピアスしてて超美形君。

「俺<sup>やのみやび</sup>矢野雅<sup>つ</sup>つーの！よろしくな！！」

「は、はい！」

「……可愛いな、由有」

「へっ？」

「ああいや！てか由有って呼んじやつたけどっ呼び捨ていい？」

ひえっ！そんな上目遣いしないでちょうだい！！  
かつこ良すぎるから！！

「全然いいです！！」

「良かった。俺の事は雅って呼んでね」

ううっ…そんなかつこ良い顔で首傾げないで！  
ドキドキものだから！！

でもこの学校って…イケメン多いよね…。

今までイケメンしか見てないけど。

郁先輩も雅希先輩も雅も。みんなかつこ良いし。

あつ河口先生もかつこ良いもんね。

お坊ちゃまだからか？

凄いねー。

こないっぱい美形見た事ないし、ちょっと両親に感謝かな！

ちゃんとやって行けるか不安だったけど、みんな優しくそうだし良かった！！

これから頑張るぞー！！！！



## 【6】

先生の話を聞いて、授業が始まった。

最初は学活みたいな感じで、学校の事やこれからの事を話してた。

それで、今は休み時間。

絶つつつ対質問攻めになると思ってたのに、みんなあたしの所に来ない。

てかみんな教室に居ないんだよね。  
何処行っただの？

「ねえ雅」

「ンあ？どうした？」

前の席で寝てた雅の背中を突っついて、あたしは聞いた。

「みんな何処行っただの？」

「ああー…廊下だろ」

「何故？みんなして？」

「うん、廊下に先輩達が居たんじゃない？」

雅は体を横にして、顔だけこっちに向けてきた。

「先輩達？何で先輩達が居るとみんな行っちゃうの？」

理解不能なんだけど…。

「そつか、由有来たばっかで知らないよな。あのな、今日の今の時間は…階段トコに先輩達が通るわけ。移動の為に」

「うんうん」

「その先輩達は学校の中で一番人気ある先輩達で、みんな大好きなのよ」

「…うん」

大好きって…男が男を？  
余計理解出来んわ！！

「だからみんな先輩達見る為に廊下に行ってるってわけ。お分かり？」

「分かったけど…先輩達ってそんな人気あるの？」

「まあな、俺は好きじゃないけど。だって郁先輩とかだし…」

「え！？」

郁：先輩？今郁先輩って言った！！？

「郁先輩！！？」

「うん、由有知ってんの？」

「知ってるって言うか…朝学校来た時、理事長室まで案内してもら

「ったんだ」

それに…あたしのファーストキス奪ったし…。

今一番会いたくない人ナンバーワンなんだよね。

「へえー…」

あれ…何か雅の声が一段と低くなつた気がする…。

どしたんだろ。

「雅？どしたの？」

あたしは雅の顔を覗き込んだ。

わっ！何か知らないけど怒って…る？

何故！？

雅顔怖いよー！！！！

ガラーツ

突然後ろの方の扉が開いた。

入って来たのは…。

こりゃまたイケメンだ!!

茶髪の髪が良く似合う人。

「あつ来たな葉月、おはよ」

雅が挨拶した彼は…こっち来てあたしの……隣に座った!!

隣だったのか!!

てか挨拶返そーよ!!

「ありゃ…何か不機嫌？葉月…」

葉月と呼ばれた人は、机に突っ伏して寝る体勢を取っていた。

「……階段トコうざかった」

「ああ……郁先輩とか居ただろ？」

階段トコ……凄そうだなあ。

郁先輩か……。

どんだけ人気あるんだろう……。

そんな人とキスしたって言ったら、あたし殺されるかな……。

間違いなく殺されるね。

「ん……てかそいつ誰？」

茶髪君は突っ伏した体勢であたしを見てきた。

「あつ上原由有です！今日転入して来ました！よろしくお願いします！  
すー！！」

今日何回目かの挨拶。

「ふうん……」

…え…それだけ？  
あなたは挨拶してくれないの？  
ちよつと！！

「ああー…ごめんな、葉月朝機嫌悪いからさ、昼頃になると機嫌直つてるからっそしたら色々話してくれるよ」

「そっか…」

悲しいね、何か…。

「葉月、挨拶だけしろよ。初対面なんだしさ」

雅の声に反応して、葉月君？がこっちを見てきた。

「…一ノ瀬いちのせはづき葉月」

言って早々と寝に入ってしまった葉月。

へえー…、そういう態度取る訳ですか。そっかそっかあ…。

…文句言いたいね。

一応初対面ですよ？

ニコツと笑う事は出来ないの？ねえ。

「葉月…よろしくぐらい言え」

「あついいよ雅、全然気にしてないしっ！」

気にしてない。いや…気にしてます。

だって仲良くなりたいじゃん！！

友達欲しいじゃん！！

あたしの望みは友達が出来る事よ。

「ごめんなこんな奴で。葉月は俺の友達なんだ。よろしくしてやっ  
て」

「雅の友達だったんだ！よろしくね葉月！！」

「うん…」



うわ！！可愛いね何か。

髪の毛弄りたいかも…。

犬っばいよ君！！

仲良く出来そうかなっ…。

雅とも友達になれそうだし、良かった！！！！

「由有！！」

「えっ？」

今誰かに名前を呼ばれたような…誰？

「おわっ！！」

雅が叫んだ。

声がした方向に目をやると…。

……え？

「……………郁……先輩……」

何で此所に……てか教室入って来てるし！！

はっ！？何だよ！！！！

ちよっとおおっ！！！！！！

## 【1】～大事件～

何か良く分かんないけど！！郁先輩がこっちに向かって来るよ！！  
???

嫌っ！！来ないで下さい！！

あたしは無意識に雅の袖を掴んだ。

「由有？」

「いい嫌…郁先輩…」

「由有…」

嫌なのに先輩は近づいて来るしー！！

またキスされちゃうの！？それは勘弁してえ！！

「そんな怯えないでよ、由有。今は何もしないって」

信用出来ません!!!

早くどっか行つてよ!!!

「先輩、由有に何したんすか？」

「別に、お前には関係ないだろ？」

「あります。由有に何かしたらタダじゃおきませんよ」

うわぁ…火花が散ってる気がする。てか睨み合い怖…。

「ふうん…まあどうでもいいけど…由有」

「ふえっ!!は、はい…」

「あの時はごめんな。ついで…由有が可愛かったから…」

「へえ!?!かわっ…可愛いつて…それ男に言う台詞ですか!?!」

「可愛ければ可愛いつて言うだろ?」

「だからってっ…」

可愛いなんて！！  
照れるからっ！！

「あ、由有顔赤い」

「っ！！」

あたしは咄嗟に顔を隠した。

嫌だぁ！！見られたくない！！  
こんなかつこ良い人に可愛いなんて言われたら誰だっ  
て赤くなるよ！！

「ははっ可愛い」

また言った！！  
うう…苛められてる気がする…。

「…はぁ…先輩、用が無いなら来ないで下さい。授業始まりますよ？」

「用ならあるよ。由有に会いに来る事」

はああ!!?

何言ってるのこの人!!

そしたら突然腕を引つ張られた。

あたしは突然すぎて声が出なかった。

いつの間にか体は郁先輩の腕の中へ…。

そして顔を近づけられ、耳元に先輩の唇が…。

「マジ可愛い、由有。俺のものにしたい」

「はっ!?!何言ってる…んっ!」

言葉を遮られるように口を先輩の唇で塞がれた。

やつ…！！キスしてんじゃん！！

「ンッ…はっ…ン…」

逃げようと手で先輩の体を押してもビクともしない。  
顔を離れさせようとしても、余計激しくキスをしてくる。

というか頭を押さえられているから逃げられない。

ど、どうしよおー！！！！

「先ぱっ…ンんっ！」

言葉を発しようとしても、先輩の口でそれすら出来ない。

やばいって！！

何か…クラクラするし…。

頭が朦朧としてきた時…先輩の舌があたしの口の中に入ってきた。

「ンッ！んんッ…！」

ちよつと待つてよ!!

無理だつてっ…!!

「はっ…ンッ…」

先輩の舌があたしの口内を犯す。

それだけでもう…何も考えられなくて、頭が回らなくて…力が入らなくて…。

…逃げられない…あたしは…先輩から逃げられない。

そう思った時…。

やっと先輩が離れてくれた。

「ハアッ…ハッ…」

今まで息が満足に出来なかったあたしは、息を整えようとする。



郁先輩はあたしの頬を撫で、優しい微笑みを向けた。

不覚にも…それにドキドキしてしまったんだ。

優しくあたしの頬を撫でる。

「…郁先輩…」

「…ごめん、我慢出来なくて…。嫌だったよな、ごめん…」

「……………」

何も言えない。

先輩のそんな優しい顔見たら…何も言えないよ…。

……てか、いつの間にか廊下は凄い人がいっぱい居て、今までのを見られたらしい。

雅と葉月は呆然とあたし達を見ていた。

は…恥ずかしい…。

「…それじゃあ、またね由有」

「え…」

郁先輩は金髪の綺麗な髪を靡<sup>なび</sup>かせて、教室を出て行った。

瞬間…あたしは腰が抜けてへなへなと床に座り込んだ。

「由有！？」

雅があたしの元へ駆け寄ってきた。

「由有！大丈夫か？」

雅があたしの顔を覗き込む。

「う…うん…」

「はあ…ったくあのエロ魔神が。由有にあんな事するなんて…」

郁先輩…。

思い出すと顔が熱くなる。

何で先輩は…あたしにキスしたんだろう。

男のあたしに…。

この学校は一体何なの？

ただただ疑問だけが頭に浮かんでいた  
…。

## 【2】

あたしはひたすら走った。髪が乱れてもそんなの気にせず走った。疲れても走った。

止まってる時間が惜しかったから。

…向かう先は理事長室。

昴さんに聞きたい事があるんだ。

それは…この学校の事。

此所は一体何なんだ!!??

…

「ハア…ハアツ…」

息を切らし、落ち着いて呼吸を整える。

「ふう…よしっ…！」

あたしはノックもせずに勢いよく扉を開けた。

「昴さんっ…！」

「おうわ…！？…由有…！」

昴さんは椅子に座って机に置いてあるパソコンに向かって仕事をしていた…と思う。

この人が真面目に仕事をするか怪しいけど。

てか今はそんな事より…！

「昴さん！！聞きたい事があるんですけど！！」

「聞きたい事？」

あたしは扉を閉め、ズンズンと昴さんに向かって行った。

昴さんは少し引ききみ。

「えーっと…どうした？」

あたしはパンツと机に手を当てた。  
そしたらめっちゃ大きい音がした。

それにビクついてる昴さん…。

ええい！！大の大人がこれくらいでビビるな！！

「あの！！この学校はこういう場所何ですか！！？男が男を襲うんですか！！？？」

昴さんは目を丸くしたまま動かない。

けどあたしはお構い無しに話を続けた。

「この学校おかしいよ！！狂ってるっ！！意味分かんないんだけど  
！！！！」

あたしは段々涙目になっていくのが分かった。

「落ち着け由有！！何があつたんだよっ！！」

焦ってあたしの肩に手を置いた後、宿めてくれた。

そのお陰で少し落ち着いたあたしは、昴さんに奥の部屋まで案内され、でかいソファーに座らされた。

二人して向き合う形でソファーに座る。

あたしは俯いたままだ。

「由有…何かあったのか？」

「……郁先輩って…知ってますか？」

「ああ、知ってるが…そいつがどうかしたのか？」

「あの人は…ホモなんですか？」

「は…？」

ああもう…！昂さんひいてんじゃん…！そりゃひくわ…！

あたしもひくし…！  
でも聞かないと駄目だし…！

「ああ…襲われたのか？あいつはお気に入りの子にはすぐ襲っ癖つ  
いてるからな」

ん？今何て？



「昂さん……それって……」

「この学校の半分以上はホモだ。勿論神無もな」

え……まじで？

まじなの？

この学校の半分以上がホモって……。

あり得ねええええ！！！！！！

ホモなのか！！みんなホモなのか！！

この学校はホモ学園なのかああああ！！！！！！

「昂さん!!!」

勢いよくソファから立ち上がり、一言。

「辞めます！！！」

こんな学校居たくない！！

ホモなんて嫌だ！！

あたしは普通の女の子なんだああ！！！！

「落ち着け由有！！とにかく落ち着くんだ！！」

昴さんがあたしの両肩に手を置き、バンバン叩く。

い…痛いんですけど…。

でもこんな学校居たくないよ！！

ホモだよ！！？

男が男を襲うのだよ！！！！？？あり得なさすぎでしょ！！！！

ちよつと親！！

大事な一人娘をこんな学校に通わせるな！！！！

てか昴さん！！！！

「何でこんな学校にしたの！！？こんな変な学校！！昴さんの趣味！！？やめてよまじで！！あたし女だよ！！？殺す気ですか！！！！」

「落ち着くんだ由有！！なっ？とにかく落ち着いてくれ！！」

「落ち着けるかああああ！！！！！！」

昴さんの手を払い、もういつその事こんな部屋めちゃくちゃに壊したかった。  
てか学校を壊したいです！！暴りたいですっ！！！！

「話を聞け由有！！確かにこの学校はホモ学園だ！！男が男を襲うのは日常茶飯事だ！！」

「あり得ないしーっ！！！！」

「言っちゃえばみんなはお前のようじゃなかつこ可愛い系が好きだ!!」

言っちゃうな!!!

しかもあたしみたいって!!それじゃあたしはやばくないですか!!!?

だから郁先輩にキスされたの!?

嫌だよこんな学校!!!!!!

「由有は女の子だ。ばれたらやばい所じゃない。…学校の男共にも、女が学園内に居ると知れたら…奴等は獣のように襲ってくるだろ」

獣!!!!!!

襲われる!!!!!!

「だがばれなきゃ良い。大丈夫だ、俺がいるから。安心しろ」

「出来るかつ!!!!!!」

安心なんて出来ないよ!!!!

危険すぎるしっ!!  
嫌だあ…。

「うつ…襲われたくない…てかもう襲われたけど…」

「神無にか…あいつは手は早いが、選んだ奴は大事にするぞ?他の男共から守ってくれる」

昴さんはあたしの頭に手を乗せ、優しく撫でてくれた。

…またそんなかつこ良い顔で笑わないでよ。

もう慣れたけど。

「守ってくれるって…あの人が一番危険なんだけど」

「今はな!とにかく…」

わしゃわしゃと頭を撫で、髪がめちゃくちゃになってしまった。

「ちよっ……」

「この学校で三年間やっていくには辛いだろうけど、由有の性格ならもう友達出来ただろ？寮長もいるし、大丈夫だ」

雅…葉月…雅希先輩…。

…そうだ。あたしは一人じゃないんだ。

大変だろうけど…嫌めっちゃ大変だろうけど!!

来た以上……。

楽しむしかないか。

どうにかなるよね、雅達いるし。うん、大丈夫だ!!

「昴さん…あたし…頑張るから！！楽しむよ！！ホモ学園がなんだっ！！ドンと来いだし！！」

あたしは胸を片手で叩いて、昴さんを見つめた。

「改めて…よろしくお願いします。昴さん」

「ああ。ごめんな由有、この学校に呼んで…でも楽しんでくれよ。俺もいるし、何かあったらすぐに言えな」

「ありがとう昴さん！！！」

あたしは満面の笑顔を昴さんに向けた。

昴さんは顔を真っ赤にして、何故か鼻を押さえている。

そんな事由有は知らず、心の中で誓ったのだった。

まあ…楽しむか!!

せっかく来たんだし!!

ホモ学園でも…雅も葉月も雅希先輩もいるしっ!!

エンジョイしよう!!!

あたしは両手を上に上げ、顔を綻ばせたのだった…。



### 【3】

授業が始まろうとしていたので、由有は理事長室を離れ、1-Aに続く廊下を歩いていった。

気分は何ともまあ微妙だが、やっていくしかなかった。

「不安だけど…超不安だけどっ!!」

頑張っ　て生活しよう。

うん。頑張れ自分。

「よしっ!!」

両手に拳を作り、意気込んだ。

キンコーン…

「やばっ!チャイム鳴ったじゃん!!」

次の授業が始まるチャイムが流れたので、由有は走って教室へと向かった。

その姿を影から見ていた者には気づかずに……。

…

ガラーツ

「間に合ったああ!!」

「間に合っていないわっ!!」

「あいてっ!!」

白い何かが由有の額に命中した。

それは床に落ち…音を立てて真ん中から割れた。

「え…」

恐る恐る黒板の方を見ると…。

世界史の先生がもう一本のチョークを持ってこちらを睨んでいた。

ううわ！！怒ってらっしゃる…。

やばい…。

「今まで何処で何してたんだ？ん？言ってみろ。しかもお前転入生だろ？転入早々遅刻とはいいい度胸じゃないか」

「えっと…理事長室に行つて遅くなりました…すみません!」

きおつけをして先生に礼をする。

先生はため息をつく、何かぼやいた。

「まあいい。今日は大目に見るとしよう」

「先生っ!」

「しかーしっ!」

ピシッと人差し指で指されてしまった。

人を指差しちゃいけないんですよ先生。

常識守りましょうね。

「次は無いからな。以上！！座れ」

「はいっ！！」

あたしは自分の席へと座った。

前に居た雅がこちらを向いてこそこそと話しかけてきた。

「理事長室に何しに行ったの？」

「ん？この学校の仕組みを聞きにつ」

「はえ？仕組み？」

「うん」

あたしは相槌を打ちながら教科書等を机に置いていく。

最後にノートを出し、そのまま広げた。

「ふーん…」

雅はそれだけ言うと、前を向いて机に突っ伏してしまった。

あたしはと言うと…。

先生の話など聞かず、ただずっと外を眺めていた…。

隣の葉月も寝ている。

次はお昼だ！！  
何あるのかなあ…。

と、由有は心弾んでいた……。

これから起こる事件など全く予想していなく……。

…

「広ーい！！！」

由有は食堂に入るなり、こう叫んだ。

お昼休み、由有と雅と葉月の三人は食堂に来てお昼にしようとしていた。

食堂は外見はもの凄い豪華だったが、中はもっと凄かった。

広すぎる敷地に、数えられない程の高級な机と椅子。

沢山のシェフ。

豪華な飾り付け。

全てが輝いていた。  
由有の目にはそう映る。

雅と葉月はそんな思い全くしなかったが。

「あっち座ろう。丁度空いてるし」

雅が指差した先は、窓際の、丸い机に三個の椅子が並んだ所。

本当に丁度よく空いていた。



「ああ！行こつー！」

由有はさっさと行ってしまった。

後から二人も続く。

三人は椅子に座り、由有は机に掛けてある電子手帳のような物を見つめていた。

「なあ…これって何？」

「それで料理を注文するんだよ。好きなもの押してな」

「すっごー…どんだけ…」

由有は料理を選び、どれも美味しそうだったが一番好きな料理にした。

由有の好きな料理は丼もの。

だから親子丼を頼んだ。

「へえー、由有親子丼好きなのか。意外だな」

雅が言う。

確かに意外だろう。

由有みたいな細っ子が親子丼など。

「そっ？あっはい！二人も料理選んで！」

雅が受け取り、料理を選んでいく。

その後に葉月も選び、あとは料理を待つだけとなった。

しかし待つ間も、三人の会話は尽きなかった。

「雅はA型っぽいね。葉月なんて尚更だし」

「由有はO型っぽいよな。いかにもって感じ」

雅が意地悪っぽく笑った。

「俺A型だけど、嘗めんなよ」

と親指を立て胸に当てる。

「意つ外ー！でも由有は犬みたいだからな。まあ分かる気がする」

「意味分かんねえよ」

由有が苦笑した。

雅は

「いいの」と言って頬杖をついた。

そして由有を見つめる。

視線に気づいた由有は、雅の視線と自分の視線を絡ませる。

「何？」

「いや……」

一瞬下を向くと、またすぐ由有を見た。

「可愛くなって思っただけ」

……は？

え？ちょっと待って。

信じたくないけど……まさか……雅は……。

……ホモ？

顔が少し赤いのが何よりの証拠。

いやいや…無いでしょ。  
雅に限って。

あたしの勘違いだって。  
絶対そう。  
そうであって欲しい。

友達がホモは嫌すぎます！！

勘違いだと思おう。

思いましょう。

「何言ってるの！雅の馬鹿野郎！」

「はっ？馬鹿野郎ってお前…」

「馬鹿だろ？雅は」

突然隣からきつい突っ込みが入ってきた。

葉月が突っ込んだのだ。

今まで寝ていたのに、いつ起きたのよあなた。

ていうか良い突っ込みだね葉月。

つい笑っちゃう。

「あははっ！！」

「えっ！？笑わないでよ由有！！てか可愛いつて冗談な！男に可愛いは無いだろ！」

あ…やっぱり雅はホモじゃなかった。

良かったあ…。

安心した。

「つーか葉月！！俺が馬鹿だと！？あり得ねえ事言ってるじゃねえよっ！！」

雅が葉月に怒った。

しかし葉月は全く動じず、また寝に入ってしまった。

「無視すんなっ！！」

雅が葉月に怒鳴り散らしていた時、料理が来た。

二人は料理が来たのに、まだ言い争ってる。

というか雅が一方的に怒ってるんだけど。

気づかないで全くこの二人は…。

「はあ… ちょっと二人共、料理来たよ？ねえ…」

「お前はいつもそういう態度だよなっ！…何なんだよ！…」

「すー…」

「まじで寝るんじゃないっ！…！」

……放つとこっう。

由有は割りばしを持ち、いただきますと手を合わせ料理を口に運ぼうとした時…。

「「「「「きゃあああああ！…！…！」「」「」「」



食堂内に黄色い歓声が飛び交った。

【4】

由有は咄嗟に耳を塞いだ。

鼓膜が破れそうなくらいにでかい歓声。

う、うるさすぎっ……！！

「な……何今の……っ」

雅に尋ねてみると、雅は心底嫌そうな顔をして食堂の出入口を見ていた。

あたしも視線を追って出入口を見る。

見ると其処に居たのは……。

……小さい男の子。

小さい男の子が歩いていた。

…あれは、誰だ？  
小さいなあ。可愛いね。

何て思っていると隣に座っていた葉月が口を開いた。

「……………何で会長がこんな所に居るんだよ」

ん？会長？会長……？

え……あの小さい男の子は会長なの？

会長………。

会長おおお！！？

「会長なの葉月！！あの人！！」

「ああ、だから周りの奴等が凄い歓声上げてるだろ？」

「…え？どゆ事？」

確かにみんな会長見てきゃあきゃあ言ってるけど。

それが…？

「そっぴゃあ話してなかったな、由有に」

「えっ…」

何を？てか雅不機嫌ね。

それは会長のせいなの？

「生徒会あるだろ、この学校にさ」

「うん…」

雅が料理を食べながらあたしを見て話してくれる。

あたしも料理を食べる。

「生徒会っていうのは、要は人気者の集まりな訳。顔が良いって事ね」

「はいい？人気者の集まりで顔が良い？」

何じゃそら！！

「じゃあ会長は…一番人気あるって事？」

「そう、だからみんなああやって歓声上げてんの、分かった？」

「う、うん…」

やっぱり雅不機嫌だ。

てか凄いな生徒会。

人気者の集まりって…、顔で選ばれるの？  
それっておかしくない？

顔だけでしょ？

その人の能力とかそういうのは無しで？

よく成り立つね、そんなの。

変なのー…。

まああたしには関係ないけど、生徒会なんて。

あたし達は一言も喋らずに黙々と料理を食べていた。

そしたらあたしの上に一つの影がかかった。

「ん？何？」

上を見上げると、其処に居たのは……。

……か、会長ーっ！！！！？？

小さな会長があたしの隣でにこにこ笑ってるんだけど！！  
何で！！？

助けを求めようと雅達の方を見ると……。

…固まってる。

ちよっとおおお！！  
助けてよ！！

「…君が、由有？」

「えっ？そうですけど…」

あたしの答えを聞いたら、会長はにこっと笑ってそして……そして？

気づいたら会長の顔が近づいてきて、チュツと小さい音が耳に届いた。

チュツ…？

チュツて…え…。

「由有…会えて嬉しい！！」

会長はあたしに飛びついてきて、抱き締めた。

あたしの思考は停止したまま…。

……何が起こったの？



一体何が…？

頭が真っ白になっていると、前からガタンツと椅子を引く音がした。

「会長！！何やってんだよ！！！！由有から離れろ！！！！」

雅の怒鳴り声と…。

「会長、また問題起こさないでくれますか？」

葉月の冷静な声が聞こえた。

「何でえ？由有は俺のものだよ」

「いつ会長のものになったんだよ！！とにかく由有から離れろって  
！！！！」

「嫌だよーだ！べーっ」

「ガキかよお前はっ…」

……。

「由有っ！…」

「だーっ！…！頭すりすりすんじゃねーよ！…！…」

……。

「はぁ…会長、由有から離れてください。由有が固まってるじゃないですか」

「そうだぞっ！…」

「えー……。…由有？」

何かが視界に入る…。

何か…何…。

『…チュツ…』

さっきのが頭の中を回る。回る。あれは……。

「……！！……ぎゃあああああつ！！……！」

今度は由有の叫び声が食堂内を飛び交った。

「えっ！？由有？」

由有の顔がみるみる内に赤くなっていく。

「…い、今今今…！！キツ…キツスををーっ…！！」

「あ、うん！由有が可愛かったから！駄目だった…？」

そう言って頭を傾げて顔を覗いてくる会長は可愛くて…っ…て…！！

「駄目に決まってますから…！！いきなり何するんですか…！！？てか離れてくださいよー！！」

何故にあたしは会長にキスされなきゃいけないのよ…！！意味分かんないしっ…！！

あたしは必死に会長の体を引き剥がす。

ちえっと言って、会長は渋々あたしから離れてくれた。

「何でっ何でこんな事するんですか！！？」

あたしは椅子から立ち上がって会長と距離を置く。

「何でっって言われてもなー…。…由有が好きだからじゃ駄目？」

「すっ…そんなの駄目に決まってますっ！！！！行こっ！雅葉月！！」

あたしは顔を真っ赤にしながら歩き出した。

「あっおい由有！！」

雅が急いで席を立つ。  
それに続いて葉月もゆっくりと席を立った。

しかし雅は歩みを止め、会長を見つめた。

「…今度由有に手を出したら、タダじゃおきませんから」

強く睨むと、会長は可笑しく笑って、雅を見た。

「それはこちらの台詞。あんたなんかに渡さないよ」

二人は睨み合った。

火花がバチバチと散る。

しかしその睨み合いは、雅が視線を外した事で終わりを告げた。

三人が去っていく背中を見ながら会長は、ただ静かに呟く…。

「……由有は俺のものだよ、分かってるよね……？」

…いつもと違う雰囲気を漂わせている会長を見た周りの生徒達は、  
一斉に息を呑んだ……。

【5】

何で…何で…何で…。

「何でキスなんかするんだあああ…！！！！」

「ほんとによーっ！！意味分かんねえよ！！あの会長め！！」

「あ…料理全部食ってねえじゃん」

此所は教室へ続く廊下。

由有の叫びに、みんなが三人に注目する。

そんな事にも気づかずに、由有はまた叫びまくる。



「会長のバカ野郎――！！！」

「うわバカ！！会長なんて叫ぶなっ！！！」

咄嗟に雅が由有の口を塞ぐ。

「むむう！？」

雅だって叫んでなかった！？

「しかも会長バカは言っつなっ！殺されるぞ――！！？」

「んん……？」

殺される？それどういう意味？

てか…息出来んわー！！！！

「んっ！！んっ！！」

あたしは力づくで雅の手を剥がそうとする。

あたしの気持ちに気づいたのか、雅がごめんと言って口から手を離した。

離れた瞬間、思い切り息を吸ったり吐いたりする。

く…苦しかった…！

「はっ…で、何で殺されるの？」

あたしは息が整った所で、疑問に思った事を聞く。

「それは……。……生徒会には全員、親衛隊つてのが付いてるんだ」

「親衛隊……？」

「……何？」

「まあ一種のファンクラブみたいなもんで。ほら、生徒会は人気者の集まりって言っただろ？だから普通にファンクラブとか出来ちゃう訳よ」

「ああ……成る程ね。で、だから殺されるって事は……親衛隊の皆様につて事？」

「ああ。しかも会長の親衛隊は過激な奴が多いからなあ……。食堂で会長が由有に抱き着いた場面だつて見てただろうし……ったくあの野郎は……全然考えてないよな……」

「ふーん……親衛隊ねえ。」

でも殺されるって大袈裟じゃない？  
何も殺したりしないでしょさすがに。

要はイジメって訳ね。

別にあたしそんなの気にしないけど。

「だから由有。これからは一人で行動するなよな、絶対誰かと居る事。分かったか？」

ガシッと両肩を掴まれ、顔を近づけてくる雅。

…うん。今はあなたが危険ね。

顔近いから。

あたしはコクンと頷いた。

「よしっ！じゃあ教室戻るか！」

雅の掛け声で、あたし達は教室へと歩みを進めたのである。

親衛隊かあ…何か嫌なの敵に回しちゃったかも。

てか全て会長のせいなんだけどね。

何で抱き着いて来るかなあ。  
しかもキスまで。

郁先輩に続いて会長にもキスされるとは思わなかった。

てかあたし、変な人にばっかキスされてない？

郁先輩はホモ人間でしょ。会長は…。

…ホモなの？

ホモだよねえ…多分。

だからキスしたんだよね。

ほんと…まともな人は雅と葉月だけじゃないの？

昴さんは何でこんな学校にしたんだか。  
呆れる…。

これから何もなければいいけど……。

あたしは雅と葉月の背中を見ながらそう願った…。

## 【1】大戦争

空が朱くなり、夕日が射し込んでくる時間……。

ある一室に、一人の男が居た。

「……っだあああ！！くそっ！」

ガシガシと頭を掻き、机にあった紙をばらまいた。

男は椅子から立ち上がり、もの凄い剣幕である場所に向かった。

辿り着いた先は……。

生徒会室。

バンッ！！

ノックも無しに男は歩みを進める。

そんな男の様子を楽しむかのように微笑んでいる男が約一名…前方で高級そうな椅子に座っている……もちろん会長。

この学園内で一番権力を持っている男。

逆らえる者はまずいない。

同じ生徒会メンバーでも。



「郁う…ノックも無しに部屋に入っちゃ駄目じゃん。常識だよ？これ」

「煩い。それより聞きたい事あんだけど」

郁はいつもよりも低い声を出し、会長を睨み付ける。

人一人殺せそうなくらいの目付きで。

「今日の昼の時、由有にキスしたんだって？」

「うん。それが？」

「手出さないでくれる？あの子に」

笑っているが、その笑みは黒いオーラを放っている為、決して機嫌が良い訳ではない。

キレている。それももの凄く。

「郁だって由有に手出したじゃん。おあいこでしょ」

会長は机の引き出しから紙を一枚取り、郁に渡す。

「副会長。…仕事」

こちらにもこりと笑い、仕事はもはや強制だった。

郁は心の中で、自分ですれよ思ったが、仕方がなくそれを受け取る。

郁は紙を一度見て、また会長を見る。

「……識<sup>しき</sup>どうせ本気じゃないんだろ？ だったら手引いてくれる？」

「本気だよ。…郁のお気に入りに興味があるんだ。しかも…由有可愛いし」

上目遣いで郁を見る識。

郁はその視線をつざそうに避けると、識に背を向けた。

「…親衛隊が動いたらしいけど、止めないの？」

親衛隊…。

ついに動き出してしまった。

識直属の。

識の親衛隊は過激な奴が多い。  
狙った獲物は逃さないのだ。  
何をしでかすか分からない。

由有がどうなるか…分からない。

識は郁の問いに楽しそうに微笑むと、告げた。

「好きにやらせとけばいいんじゃない？」

「あんたの大事な由有が何されてもいいの？」

「良くないけど…今は何もしないでしょ。だってこれから…あのイベントがあるから。まあ由有泣かせたなら黙ってないけど」

識の瞳が鋭さを増した。

いつもの識ではないこの雰囲気。

醸し出しているオーラだけで相手を圧倒出来る程だ。

郁はいつもこんな識を見ているから怖くも何ともないけれど。

「あのイベント…か」

郁はため息混じりにそう呟いた。

「もちろん郁さんは由有狙いでしょ？」

「どうか……。あっじゃあこれやつとくから、会長もきちんと仕事しろよ」

郁は紙をヒラヒラさせながら扉へと向かい、部屋から出ていった。

識は郁が出ていった扉を見つめる。

「逃げられた…。まあでもいつか、予想通りだし」

識は座っている椅子をくると窓の方へ向けると、空を見上げた。

「…また来たのか。あれが……」

識は遠くを見ながら、静かに、呟いた……。

嵐が吹く、10秒前。

## 【2】

「雅さんっ！！それもう一度！！！」

シュパッと右手を挙げ、雅に催促する由有。

場所は変わり、此所は由有の部屋。

という事は、寮の中であると言つ事。

寮の中に入った時、由有が驚いたのは言つまでもない。

寮に入って由有の第一声が…。

「あり得ないあり得ないあり得ない………どんだけだよちょっと………」

…だ。

ついには呆れて何も言えなかったらしい。

まあ何回も豪華な物見せられたら誰だって呆れちゃいますね。

ちなみに作者は呆れます。

あ、すいませんいきなりどうでもいい情報。

気にせず先をお読み下さい。

「だから、明日は大イベントがあるから授業は1日無いの。で、その大イベントの名前が…」

「……プリンセス強奪戦争??」

「そっプリンセス強奪戦争」

「ほんと変なネーミングだよ。誰が考えて…あ、会長か」

と独り言を仰ってるのは葉月で。

あたしはそうかどうかと思うイベントの名前に、頭を真っ白にしていた。

「プリンセス強奪戦争って言うのは、三年の生徒全員が一、二年の生徒全員の中で好意を持ってる奴を追いかけまわすって事で…えっと…」

「三年が一、二年の中で好きな奴を追うんだ。つまりプリンセスを捕まえるって事」

説明が出来ない雅に代わって、葉月が説明する。

…てことは…あたし達一年と二年が三年に追われるって事だよな？

三年が好意を持ってる人が。



じゃあ追われる人は限られるじゃん。

一部しか楽しめたくない？いや、あたしは別に楽しまなくても良いんだけど。

平和が良いし。

てかプリンセスって男がかい。

キモいわねえ。

「んで、三年は捕まえた奴を自分の物にする為に、ネクタイを渡すんだ。学校側から寄付されたネクタイな。そのネクタイには自分の物を主張する為に必要な刺繍が入ってる。三年は刺繍が入ったネクタイを持って追いかける訳で…」

「捕まった後輩は、三年から貰ったネクタイを付けなきゃいけない。それでカップルが成立するんだけど」

「カップル成立しちゃうの！！？？無理矢理ネクタイ付けられても！！？？」

「ああ。だから逃げるんだよ。嫌な三年からな」

うわぁ…辛いはそれ。  
三年怖くない？怖いよ。

あたし達必死で逃げなきゃ駄目じゃない？  
捕まったら一生そいつの物って訳でしょ？

……ん？

「ねえ…ちよっと待って」

疑問が出るよね此所で。

「その自分の物の期限はいつまで？もしかして……」

「由有が思ってるような期限じゃねえよ？一生とか」

あ…そっか。  
良かった…。

「三年が卒業するまでな」

「でええええええ！！！！？？卒業するまでええええ！！！！？？？」

長くない！！？？

長いでしょっ！！！！

可哀想だろ！！！！

長えよ！！！！

今まだ5月の後半ですけどお！？

それまでずうずうつとそいつの物なの！！？

はっ！嫌すぎるねそれは！！

あたしだったらその三年ぶっ倒してネクタイ取って独り身になるね！！

「でも毎回ラブラブになるカップル多いんだぜ？しかも捕まった奴は安全だからな。捕まえた奴が人気者なら絶対」

え？雅さん…それどういう意味？

「例えば生徒会の誰かに捕まったとしよう。そいつの持ってたネク

タイを付けておけば、周りからは虐め等されない。したくても出来ないだろ？何てったって生徒会メンバーがくれたネクタイだから。お分かり？由有」

「…権力がある奴からネクタイを貰えば、他の奴は手出し出来ないって事？」

「そういう事！！要は安全！」

「守られるって事だ」

葉月が嫌そうな表情でため息混じりにそう言った。

…確かにそれは安全だ。  
危なくないし、みんなホモならいつ誰かに狙われてもおかしくないし。

守られる…。

三年が卒業するまでだけど、結局カップルになるんだから、いつまでも…。

……ふうん。

迷惑なイベントだけど、安心するねそれは。

毎日楽しく過ごせるわ。

でも……三年全員が権力ある訳じゃないじゃん？

みんなお坊っちゃまだけど。

権力あるのって生徒会だけでしょ？

生徒会以外からネクタイ貰っても安全なの？

「ねえ……」

「うん？」

「生徒会以外からネクタイ貰っても安全？」

「ああー…まあな。三年ってほぼ全員権力あって人気だから。しかも今年の三年はめっちゃくちゃな」

「へえ…それはまた俺達にとっては嬉しい事で…。あっけど貰えな

い人達だつて出てくるよな？」

そうだよ。

誰からも好かれない人だつて居る訳で。  
失礼だけど居るんでしょう？

「普通に出てくるな。当たり前だけど。ただ明日1日平和で過ごせるけど」

「そうだよな…それからの学校生活がどうなるか分かんないけど…」

「ああ。だから微妙なイベントなんだよ。幸せになる人と不幸せになる人が必ず出てくるから」

「一、二年の中でも、三年に好意を持つてる奴だつて居るだろ？そこから貰えなかったら…」

「告白して断られたみたいだよな」

「まあな」

…うん。そうだよ。

このイベント…告白と一緒にだ。

好きな人からネクタイ貰わなかったら、もう自分に眼中ないって思うじゃん。

貰えたら幸せだよね。

好きな人とカップルになれるんだもん。

何か…切ないね。

イベントが終わった時にさ、好きな人が他の男子とくっついてたら嫌だよね。

あたしだったら嫌だ。

もしあたしに好きな人が居て、その人が他の誰かとカップルになったら……。

……て。

バカじゃない？あたし。

本気で考えるなっつーの！もして言うか、あたしは好きな人要らないから！

てかこの学校内で好きな人出来たら凄いね！！  
みんなホモなのにさ！！

出来たらつけるー！！

「…な、なあ葉月…由有が…怖い…」

「いつもと様子が違うな…笑ってるけど不気味だ…」

二人が小声でこんな事を言っていたなんて知る由もなく、由有はいつまでも不気味な笑いを浮かべていたそうな……。

「…ゆ、由有！！」

「ん？何、雅」



堪らず雅は由有に呼び掛けた。

だつて怖いんだもんっ！！

「あ…明日だけど！！絶対に俺達から離れるなよ！！分かったな！？」

「へ…？何で？」

「それは…（こいつ…自分が狙われる獲物だつて分かってねえな？）」

「俺達…友達だろ？由有」

「「えっ…」」

「友達なんだから一緒に居るのは当たり前だ。違うか？」

「いや…違うない…けど…」

…葉月…キャラ違う…。  
変…。

…やだ！！不気味！！！！キシヨイ！！！！

「……………」

葉月さん…キャラ壊れてます。

誰ですかあなた。

「（だってこうしないと由有聞いてくれないだろ？天然ぽいし。自分のキャラが変わるのは嫌だけど…仕方ない…よな？）」

何ていう葉月の心の眩きなどもちろん知らない二人は、それから葉月に話しかけられなかったそうだ。

だって葉月ずっとにこにこしてるから……。  
怖いんだもん（由有、雅の心情）

「…あっただけどさ雅！」

「ん？なあに由有」

「俺は転入してきたからイベントの事分かってないけど、雅達は妙に詳しいよな！何で？もしかしてこのイベントって4月とかにあった訳？」

「あー…違うよ。この学校が小、中、高一貫なのは知ってるよな？」

「知らない…そうなの？」

「知らなかったのか！！てかそうなのね？小学校の時はさすがに無かったけど、中学校の時はあったからさ…。辛かったなあ…ほんと…」

あ…雅が遠くを見つめてるよ。  
よっぽど大変だったんだなあ。

「そっか…。だからなんだ…」

プリンセス強奪戦争かあ…。

無事終わると良いな。

どうか無事に終わりますようにっ…。

由有は顔の前で手を合わせ、心の中でめっちゃ願った。

……神様は、由有の願いを聞いてくれるのか…。

それは明日になってみないと分からない……………。

## 【2】（後書き）

説明長かったですね…。しかし次回は話が大きく動く予定…。です。

【3】

まだ微かに涼しい季節。

そんな中で……由有は今、ものつつ凄い暑さを感じています……！！

「三年共……！マイネクタイは持ったあ！？」

「……ういーすっ……！！」「……」

「じゃあプリンセス強奪戦争のルールを説明するなっ……！」

と、何だか暑苦しい始まり方をした彼……聖洸輝学園の会長。

名前は……昨日雅から教えてもらったんだけど。

ううんと……なんだっけ……？

「今年も盛り上がるなあ。識先輩の挨拶は」

「ああ、さすが識先輩だよな」

おお……！そうそう識だよ……！！  
識……！！

ありがとう生徒Aと生徒B！！

「はぁゝあ！！始まっちまうよっ！」

隣に立っていた雅が、腕を上には伸ばして大きく伸びをした。

「眠……すー……」

またまた隣に立っていた葉月が……立ったまま寝てる！？  
器用なお兄さんだ事……。

てか寝顔可愛えなあ……睫毛長っ！！  
葉月って女顔だね。

……ってかあたし何してんの！！？  
何葉月を観察なんかしちゃってんのよ！！  
変態かい自分！！キモいわキモい！！！！

「……で、三年共はネクタイ持って一、二年を追っかけまわしてくださいあい！！一、二年は捕まったら最後！！捕まえた三年のものになってねっ！」

ああ……あたしやばいな。

この学校に来てから変態チックが身に付いたよう……。

違う！！あたしは絶対に此所に染まらないんだからっ！！

「後はみんな去年もやってるから知ってるよね？じゃあ始めるよ！  
」

うわっ！！来た！！

「まずはピストルの合図に、二年が校舎内を駆け回ってください  
！グラウンドも良いからね！！隠れるのも有り！！で、15分後に  
三年が追いかけるから、そしたら戦争の始まりだああ！！」

「「「うおおおおーっ！！！！」」」

ううわ！！むさい！！  
始まつちゃうのかー…。  
最悪だあ…。

あたしは追いかられないよね？  
大丈夫だよね？

何か不安になってきた…。

「み…雅…」

怖くなり、咄嗟に雅の袖を引っ張る。



「ん？どうした由有」

「……一緒に居てね？」

…あれ。何か段々と雅の顔が赤くなってく…。  
どうしたんだ？

「雅ー？顔赤いけど、どうしたの？」

由有が雅の顔を覗き込む。雅は数秒固まっていたが、一瞬だけ目を見開いて…。

「っ…！…おお！一緒に居てやるよっ…！」

「うんっ…！」

良かったあ！これで安心だよ！

「…葉月…ほんとあいつ天然で分かってねーよ…」

雅は寝ている葉月の肩に手を置いて…泣いていた……。

「じゃあピストル鳴らすよー！！みんな準備はいい？行つくよー！！」

識は右手にピストルを持ち、撃つ用意をする。  
そして…。

「よーい…スタート！！！！」

パンという音で、一斉に一、二年達が体育館を走り出した。

「うわっちょ…」

みんなの気合いに、由有は呑み込まれそうになる。

少しふらついてしまった。

「由有！！俺達も行くぞ！！」

平常に戻った雅が、由有の手を引き走り出す。  
葉月も二人に続いて走り出した。

「ねえ雅！！これから何処行くの！？」

周りの煩い音にかき消されないように、由有は大声で雅に聞く。

雅も由有の声に気づいて、振り向く。

「とにかく走る！！」

「ええ！？」

雅の言う通りに、三人は広い校舎内を他の生徒と一緒に走り続けた。

これから三人はどうなってしまうのか…。

まだ戦争は始まったばかり……。

## 【4】

「葉月！！あと何分？」

「あと…1分」

「1分か…すぐだな。由有、走りっぱなしだったけど大丈夫か？」

「う…うん…」

本当はめっちゃくちゃ苦しいけど！！  
三年怖いし休んでらんないよっ！！

「あと1分だっけ…？」

「ああ…無事終わるといいけどな…」

「お昼に終わるんだよね？長いよお…四時間もあるじゃん…」

このイベントは、1日使うけどお昼までだ。  
午後から自由時間になり、休んだり出来る。  
でもそれまでが長いんだよ…。  
耐えられるかな自分…。

すると突然…地震のような振動がやってきた。

「えっ…何？この揺れ…」

「はぁ…始まったな」

「えっ！始まつちやったの!？」

噓!!もう!!?やばっ!!怖い!!!

段々揺れは酷くなっていき…本格的に揺れ始めた。

「うおっ」

「ああ…来た。葉月、これからどうする？此所も時間が経てばすぐ見つかるけど」

「確かに…もう少し経ったら移動するか」

あたし達は今、あまり人が来ないと言われている場所…職員が使う校舎の一番端の教室に居る。

此所は今のトコ安全らしい。

しかし時間が経てばとても危険な場所。

何故なら此所は、追い詰められたらもう逃げられないから。

一番端ってこういうのが厄介なんだよね。

言っちゃえば何処の校舎も全部安全ではない。

一、二年は本当に恐怖に怯える。

「あつ！彼処の人達捕まってる！！」

窓から由有が指差した先には、泣きながら三年に捕まってる一年の姿。

哀れだ……。怖いよ三年。

「可哀想に……。しかもあの三年共有名な小崎達じゃん。あの一年の笑みは無くなるな、これから先」

ええ…そんな怖い事言わないでよ雅。  
あたしとか捕まったらどうすんの？  
めっちゃ危険よ？  
女だし、何されるか分かんないよ。

いや、追われるって決まった訳じゃないけど。  
不安だし…。

「雅……」

「ん？どうしたんだよ由有。不安か？」

雅が由有の頭に手を乗せ、優しく撫でてくれる。

それがとても安心するんだ。

雅の手も。笑顔も。

「大丈夫だ由有。お前に何かあっても、俺達が絶対に守ってやるから」

「え……」

「ちゃんと安全な場所に置いてやる。だからそんな顔するな、由有」

葉月……。二人共……。

……嬉しい。不安が消えていくよ。

二人の言葉は凄く安心する。

だからもう怖くない。

雅と葉月が居る。

だから大丈夫……。

「うん……。ありがとう、雅……葉月」

泣きそうになるのを堪えて、あたしは笑った。

二人も笑って、何だか暖かい気持ちになったんだ。

ガラーツ

「「「!!?」「」」

突然教室の扉が開いて、あたしは心臓が飛び出しそうになったまま、開けられた方へと振り向いた。

二人も同じ。

其処に居たのは…。

「やっぱり此所に居た」

「……何でこの場所に居るって分かったんすか？」

威嚇するような雅の問いに、彼は苦笑して雅を見た。

「由有の場所なら何処でも分かるし」

「なっ…何言ってるんですか!!会長!!」

会長…。

扉にもたれかかるように、会長が其処に立ってた。



なんだろう…。

あたしはこの時、どうしようもない不安に駆られたんだ…。

その原因は……。……段々と強くなってくる地震のような振動。

もうあたしには、これからどうなるのか、全く予想出来なかったんだ…。

【5】

「ねえ由有」

「は、はいっ」

会長がにこやかな王子様スマイルで話しかけてきた。  
ほんつといつ見ても可愛らしい人だ、天使の微笑みだよ。

「郁に会った？」

「えっ？郁先輩ですか？いえ…会ってませんけど…どうしてですか？」

「うんにゃ？会ってなかったら良いんだ。……ところで三人共」

会長は順番にあたし達を見る。そして…。

「早く逃げた方がいいよ？」

「はっ…？」「はっ…？」

三人の声が綺麗なくらいにハモった。

しかしあたしの頭は数秒機能停止した。

会長の言葉をすぐに理解出来なくて…でも雅と葉月は…。

「まじかよ…もう来たわけ？」

はぁ、と雅が深くて長いため息を吐いた。

「なら行くか…捕まったら最後だしな」

だるそうに言う葉月。

えつと…まだ理解出来ないんですけど…何を皆さん言っているのかしら？

教えて下さい！！

「なら由有はこっち」

グイッと力強く前へ引つ張られ、そのまま会長の腕の中へ…え！？

「ちよっ…会長おお！！？」

何故に会長の腕の中に入らなきゃいけないの！？  
こっちの方が理解出来ないよっ！！

「おい会長！！何してんだよっ！！由有放せって！！」

「そ、そうですよ！！何でいきなりこん

「あいつらはお前達が狙いだから。そんな中に由有一人だけ放置は可哀想だろ？だから俺が貰ってやるよ」

あたしの言葉は会長の台詞に遮られて、理解出来ない言葉達を並べる会長は、…意地悪そうな笑みを浮かべていた。

「じゃ、そういう事だから。またね」

それだけ告げると、あたしの手を引っ張って廊下に出される。それと同時にもう一つの扉から、沢山の男子が…わんさか教室に入っていた。

え…これって…。

「「「矢野ー！！！！！！」」」

「「「一ノ瀬ーっ！！！！！！」」」

色んな種類の男達が教室に入っていた。  
それはもう凄い速さで。  
しかもめっちゃ多い。

ちょっと待って、これはまさか……。

「「うわああああ……！！！！」」

二人の叫び声が聞こえる。とても苦しそうな…助けてあげたくなる

ような声。

あたしはすぐに理解した。この男達はみんな、雅と葉月が狙いなんだ。

だから会長はあたしを避難させたのか。

それは嬉しいけども……。二人がととても可哀想よ？

「やめろっ！！くつつくな！！てかどこ触ってたよ！！！」

「くそつたれ！殺されたいのかよお前達は！！放せ！！！」

あああ…二人が捕まってしまう。

助けたいけどあたし一人じゃどうにもならないよ。

こんな中に入っていくたくないし……。

「大丈夫だよ、二人は」

「え…？」

大丈夫？何を根拠に？

こんな酷い状況なのに？

「そんな落ち込んだ顔するなよ」

優しくあたしの頭を撫でてくれて、微笑んでる会長はとても綺麗だった。

あたしとした事が…魅とれてしまったのよ。  
あまりにも会長が綺麗だったから。

今…分かったかもしれない。

会長が一番の理由。

優しいし、会長から漂ってくるオーラみたいなものが他の人と全然違う。

きっとこの人は……凄すぎる人だ。

あたしじゃ想像もつかない程に。

だから…会長になったのかもしれない。

みんなから愛されたから、だからこの人は……。

「由有？俺に魅とれてんの？可愛いなあもう」

会長の顔がゆっくりと近づいてきて、でも由有は全くその事に気づかず、そのまま…。

「…ん！？んっ…！！」

なっ…何で会長にキスされてんの自分…！

魅とれてたあたしが馬鹿だった…！

だって会長綺麗だったから…！

由有が頭の中で葛藤していると、少し開いた唇の隙間から、会長の舌が入ってきた。

咄嗟にあたしは会長の服を握る。

会長は角度を変えて、もっと奥まで入り込んできた。あたしはその度に吐息が溢れて…。

逃げられなくなっていた。

「かい…っふ…ん…」

やばい…こんな…流されちゃ駄目だって!!  
逃げないと…っ。

「っ…はあっ…っ！」

ガリッ

あたしは会長の唇を噛んだ。

会長は眉間に皺を寄せて、ゆっくりとあたしから離れる。

苦笑しながら自分の唇を拭う。

「ひどいよ由有、唇噛むなんて」

「なっ！会長がこんな事するからでしょ!？」

顔を真っ赤にしながら言ってもどうにもならないよ自分…。

「顔真っ赤だよ、由有。可愛いなあ…」

愛しいものを見るような瞳で見つめられると…。  
余計赤くなるっつの!!

「やめてください!!! てか会長の方が可愛いですからっ!!」

これほんと。絶対に会長の方が可愛いから。  
あたしなんかより。

「何言ってるの? 俺は由有の方が可愛いと思うよ。だからさ…由有」

突然会長の顔が真剣な表情に変わった。  
あたしは無意識に背筋を伸ばしてしまう。

「……俺のネクタイ、貰って?」

「え…?」

会長の…ネクタイ?  
何で…何であたしが?  
えっ……。  
どういう事よ!!!

由有。ついに狩られる時間がやってきてしまった。



## 【6】（前書き）

何だか久しぶりの投稿ですか？私にはとても久しぶりのように感じます。というか、久々に“愛を。君を。”を執筆いたしました。はい。やっと調子が戻ってきたので、執筆する事が出来ました。またよろしくお願いします。

【6】

普通に学校で友達作って、普通に授業を受けて、楽しい楽しい高校生活を送る予定だったんだけど……。

神様は意地悪だよね。

由有は今、会長から言われた一言が理解出来ずに固まってしまっていた。

固まったままの由有に、容赦なく会長が接近する。

近づいてきている会長に由有は全く気づかないで、目を開いたまま硬直状態をし続ける。

由有の頭の中は、会長に言われた言葉を理解するのに必死だった。

……会長のネクタイを……あたしが貰うの？ 何で？何であたしが会長のネクタイを？

駄目……分かんない。

分かんないから……会長に聞く！！

「か、会長……おおおお！！？」

気づけば会長との距離は30センチをきっていた。

近づいてくる会長に気づかないで、自分の世界に入った由有が悪いのだから、自業自得と言うのだろうか。

由有はあたふたしてしまい、まだ近づいてくる会長を制止出来なかった。

それを良い事に会長はもっと距離を縮める。

いつしか由有は、後ろの壁に押さえつけられていた。

「会長っ！ 何っ……」  
「由有……」

耳元で甘い声を囁かれた由有の体は、ビクンと肩を震わせた。  
顔も徐々に赤くなっていき、会長の空気にもうやられてしまった。  
其処から逃げ出す事は、不可能に近いだろう。

会長を取り巻く空気……オーラは、人を魅了するもの。逆らえる人はいない。

いや……逆らおうとする人はいない。  
この学園の中には……ただ一人を除いて。

「離して下さい！！ てか突き飛ばしますよ!？」

「あつその台詞由有には似合わない。突き飛ばすなんて言わないで

……もつとこう、別の……」

「だああああ！！！！ どうでもいいから離れて下さいーっ！！！！」

本当に限界だった。

こんな美しい顔が目の前に迫ってくれば、誰だって離れなくなる。  
離れたい。

由有は渾身の力を振り絞って、自分よりも小さい体を無理矢理引き剥がした。

しかし体は自分より小さくても、会長は男。

力の差は歴然である。

一旦は引き剥がしたが、また壁に押さえつけられて、綺麗に元に戻ってしまった。

「っ……！！」

「観念しなよ、由有ちゃん」

由有にはこの囁きが、悪魔の囁きに聞こえた。

本当に悪魔の囁きなのだが。

……どうすればいいの！？てか何でこんな事になってんのよー！！！！  
誰か助けてー！！！！

強く目を瞑り、助けを呼んだ。

そんな可哀想な由有に神様は同情したのか、なんと助けが来てくれたのだ。

しかしその助けに（？）来た人物は、あまりにも意外な人物で……。

「……何やってんの？」

「……あゝあ、邪魔が入った」

誰かの声によつて、会長が落胆の声を漏らした。

会長はゆつくりと声の人物に振り向く。

由有もそれに合わせて顔を上に上げ、その人物を見た。

「……た……」

助かった……。

由有の心の声は、まさにそれだった。

## 【6】（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。ゆっくりとですが、徐々に投稿していきたいと思います。

では、また次回でお会いしましょう。

## 【7】（前書き）

ものすごい久々の投稿です！ 本当に久々です！！ 前回の投稿から何日も経っていますね。本当は早く投稿したかったんですけど、上手くいかず……（涙） ですがっ！！ これからはきちんと早く投稿をつー！……いえ、絶対に亀並の遅さです。次の投稿はまた久々になると思います。ですが見捨てないで頑張りますので、どうかよろしく願いしますm（――）m

【7】

天からの授かり物だ……。

由有の思考は、イツちゃった。

それに誰も気づかないで、話は進む。

「識……何やってんのさ。何で由有襲ってんの？」

「はあゝ……雅希には関係ないだろ？ 邪魔だからどっか行ってくれ。」

会長は心底嫌そうなため息を吐くと、シッシツと虫でも追い払うような手の動作をした。

しかし雅希はどこにも行かない。  
むしろ二人に近づいてきた。

「何なのさ……」

識はまた盛大なため息を吐くと、由有から離れて雅希と向き合った。雅希は自分よりも低い識を睨んで、識も識で身長に負けないくらいに思い切り雅希を睨む。

二人の視線が痛い程にぶつかり、由有は心なしか体を震わせた。それくらい二人の睨み合いは凄かった。

直視出来ないくらいに。

「識、由有から離れろ」

「何で？ 雅希には関係ないじゃん」

「識の考えてる事なんてまるわかりだから。だから離れろ」  
「いゝや」

……なんだろう、この光景。二人が小さい子供のような口ゲンカをしてるよ。

止めた方がいいのか悪いのか。

さっきの睨み合いはどこへ行った。

「ちよつと会長、雅希先輩……」

やっぱり止めようと思った由有なのだが、由有の声にも二人は気づかないで口論を続けている。

「ねえ……」

「識は男なら誰でもいいんだろ？ だったら由有に近づかないでくれる？ ネクタイだって他の奴にあげればいいだろ」

「由有の事は本気なの。本気で奪うから」

奪っ！？ 意味分かんないよ会長！？

「またそんな事言つて……」

「雅希には分かんないよ。だから手出さないで」

そう言つて識は由有に向き直そうとしたのだが……。

それを雅希は許さなかった。

識の腕を掴んで、由有から遠ざける。

そしてそのまま小柄な体を窓の方に吹っ飛ばした。ガンツと嫌な音がする。

識が窓ガラスに思いきり体をぶつけたのだ。

とても痛そう。

でも識は余裕そうな笑みを浮かべるだけだった。



「はれ……。痛くないの？」

つい口に出してしまった。だってあんなに強く体をぶつけたのに、痛い顔一つしないから……。

「雅希。俺にこんな事してタダで済むと思ってんの？」

「……………」

雅希先輩は無言。

でも鋭く会長を睨み付けてる。

今までの雅希先輩からは想像も出来ないくらいの表情だ。

会長はゆっくりと腰を上げると、雅希先輩を睨み付け、そして可笑しそうに笑った。

ていうか……。

雅希先輩ってこんな事する人だったの？

人鷲掴みにして放り投げて、めっちゃ怖い顔で睨んで。

何か……イメージが……。

「さあて……と。どうしよつか？」

ユラリと、会長が動いた。まずい！ あの体勢はもしかして……。

戦闘体勢ってやつですか！？

まずいよー！！ まさかケンカしちゃうのあなた達！！やめてえええっ！！！！

「ちよつと二人共！！ 話せば分かるって！！ だからケンカは……！！！！」

次の瞬間。

由有の目の前はスローモーションで流れた。

いや、本当はスローモーションで流れてないのだが。由有にはそう

見えた。

生のケンカ。殴り合い。

尋常じゃない動き。殴る音。

やばい……やばいやばいやばい……！！

ほんとにケンカしてるよーっ！！！！

何でケンカなんかしてんだよ馬鹿野郎……！！

今すぐ止めろっ……！！

……って、叫びたいけど叫べない。

小心者の由有ちゃん。

二人に圧倒されて叫べないんです。

このっ役立たず……！！

って自分自身に突っ込んだり。

ああ……マジで止める方法考えないと。

てかこの二人マジ切れしてない？ 雅希先輩の顔は怒ってる顔してるから本気怖いし、会長なんか笑ってるけどその笑いが黒いから怖いし。

もう何なんだこいつら。

ぶっちゃけ何なのよ。

何でケンカすんの。

こっちの事も考える。

てかあたしもキレそう……。拳作ってそれがフルフル震えてるから。本当に……二人は……。

「すうー……、はあー……。すうー……。……お前等ああああ！

……！！いい加減うざいからまじ止め……っ」

ポチッ

………は？

ポチッ……？　今ポチッて音がした。ポチッて……。……何？

ガチャンッ！

「え……？」

なんか……地面が無くなる感じが？  
しかもガチャン？　ガチャンって何？　何？

「……（はっ）由有！！」

「えっ？　……て、ぎゃああああああっっっ！！！！！！」

落下落下落下ー！！！！！！！！

落ちてるからああああ！！！！！！！！

意味分かんないしー！！！！！！！！

「誰かああああああ………」

「………」

由有が開いた地面に落ちていった……。

識と雅希は、ただただ呆然と由有が落ちていった方を見つめてるだけだった……。

## 【7】（後書き）

うわぁ……。微妙な終わりになっちゃいましたね、これ。由有はど  
うなるんだろう？ 次回をお楽しみに！！ ですね。一応話は決ま  
っているので、頑張つて執筆します！！ では次回もよろしくお願  
いします。また次回でお会いしましょう（＾＾）／

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4643c/>

---

愛を。君を。

2010年10月10日06時08分発行